

修験者の服装

「三関三渡」として知られる出羽三山の巡礼とは、修験道の行者が歩む再生の旅です。修験道とは、山で修行に努める古くからの伝統であり、仏教と神道両方の要素を含んでいます。

修験道の行者（修験者）は、死者が葬儀の際に着る服に似た特別な服装（白装束）を身につける伝統があります。この服装は、修験者の過去が死に、精神が再生することを象徴しています。修験者は、聖なる出羽三山におわす神々の中を歩いている間に、精神の再生を経験するのです。修験者は、数日をかけた巡礼から戻ってくると、精神的に生まれ変わります。

修験者の白装束とは、市松模様の上着の下に着る白い服装のことです。白装束は、象徴的であるとともに実用的です。下半身にはくゆったりとした白い袴は、裾から石が入るのを防ぐために膝下でまとめます。ふくらはぎを覆う脚絆は、虫刺されから身を守ります。頭を包む布（宝冠）は、大日如来像が身につけている冠を象徴しています。この布も実用的です。この布は、寒い日には顔を温め、暑い日には汗を拭くのに使えます。また、この布は、怪我の止血が必要な場合に止血帯として役立ちます。履物の地下足袋は、ビーチサンダルのように、つま先が親指とその他の指で分かれています。つま先が分かれていることで、山を登る際の安定性が増します。この服装を完成させるのは、歩く際に使う金剛杖です。この杖で、上り下りを助けます。この杖の形は八角柱で、その各面は発心・修行・菩提・涅槃といった修験道の様々な特性を表しています。

現代の多くの修験者も、なおこれらの服装をしています。出羽三山における修行の実践は、地元の修験者の指導のもとで行われます。